# 枕草子　第六回

## その六　おなじことなれど

おなじことなのに、聞く者によって違って聞こえるものは、法師の言葉、男の詞（ことば）づかい、女の詞づかい。下衆の詞づかいには、言われた言葉以上の意味がある。

## その七　思わん子を

もしも、大切に思っている子を、法師にしなくてはと思っていることほど、心苦しく、可哀そうにと思うことはない。

なにしろ法師が、どこにでもある木の一切れのように思われているのが、とってもかわいそう。

精進料理みたいに、美味しくもないものを食べなくてはならないし、グッスリ眠ることだってままならない。若い時には、どんなことにだって興味を引かれものなのに、女の人がいたりすると、まるで忌わしいものでもあるかのように、見ないようにしながらついちらっと見たりなどもして、そうすると、それは心に安らぎがないからだと言われてしまったりする。

ましてや、修験者などは、さらにさらに息苦しくも大変で、疲れてついうっかりうとうととしようものなら、寝てばっかりいるんじゃない、と怒られてしまう。なんて生きづらく狭苦しいところでしょう。

まあ、そうはいっても、修験者が大変なのは昔のことで、今はずっとずっと楽ですけどね。

文中の色文字は清少納言が用いた用語をそのまま用いています